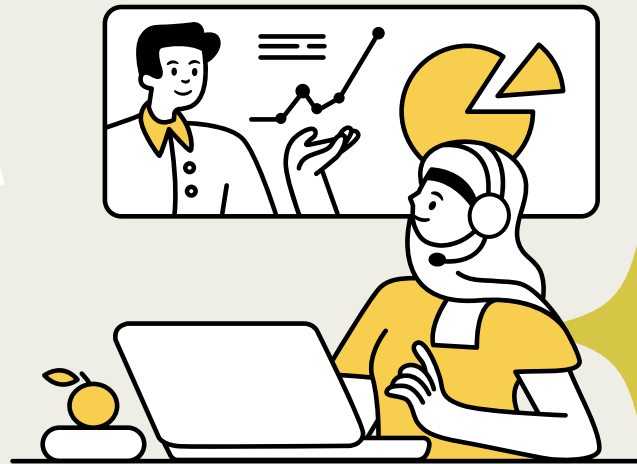
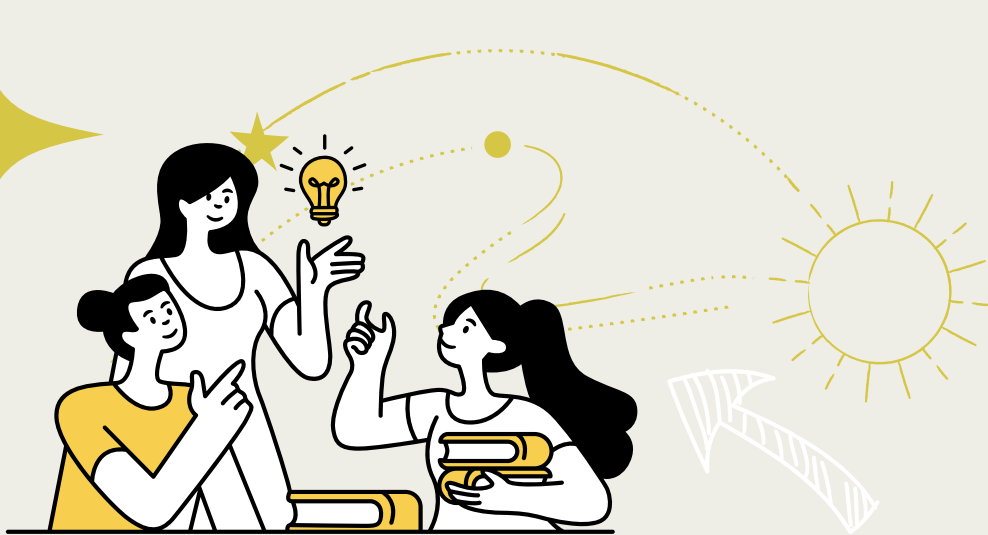


地域連携型教育における

オンライン 活用事例集

2022



龍谷大学政策学部
地域協働総合センター

龍谷大学は、京都市の「学まち連携大学」促進事業[発展型]に採択され、京都文教大学と共に「伏見をフィールドにした地域連携型教育プログラムの展開-まちぐるみキャンパス（学び合いのコミュニティ）の深化-」に取り組んでいます。

コロナ禍で学生がフィールドワークに出ることが難しくなりましたが、オンラインと対面を組み合わせたハイブリッド型授業が定着し始めています。ハイブリッド授業のさまざまな工夫や経験を蓄積するために、2021年度に引き続き「地域連携型教育におけるオンライン活用事例集」を作成しました。

2023年3月

龍谷大学政策学部・地域協働総合センター

掲載事例

- 01 **オンラインと対面を組み合わせた
大学と中学校の連携授業**
- 02 **オンラインフィールドリサーチ**
- 03 **大学と地域で「手作り竹灯籠 &
星空鑑賞」イベント開催**
- 04 **相互訪問型国際交流プログラムの
事前学習で活用されたオンライン学習**
- 05 **龍谷IP事業「龍谷大学だからこそ
3キャンパス共通オンライン授業の展開」**

01 オンラインと対面を組み合わせた 大学と中学校の連携授業

授業・プログラム名

政策実践・探究演習（国内）
「亀岡・南丹プロジェクト」

担当者

龍谷大学政策学部
准教授 大石 尚子

スタッフ数

大学：13人
フィールド：3人

受講生数（実施年度）

22人（2022年度）

使用した機材

大学：PC、
ZOOM

中学校：
ipad、ビデオカ
メラ

オンライン活用の目的と内容

「亀岡・南丹プロジェクト」は南丹市日吉町世木地域で、地域課題の解決のために地域資源の発掘や人と人のつながり創出めざして活動している。活動プロセスの中で中学校と関係ができ、総合学習の時間を使って2回の連携授業を実施した。1回目の授業はオンラインで大学と中学校をつなぎ、大学側から情報提供を行い、生徒に対し、自分の住んでいる地域の宝物を探してくるよう宿題を出した。2回目は対面形式で、大学生が考えた地域資源を新商品アイデアと中学生からの自分の住む地域の宝物が紹介され、それを受けて複数の資源をかけ合わせて「〇〇×〇〇＝地域の新商品」を考えるワークショップを行った。大学生はグループのファシリテートを担った。

取り組みから得られた効果

中学生の地域再発見と大学生による子どもの声を活かした商品開発へのアイデア集めというWin・Winの事業実現に至った。

1回目のオンライン授業で情報提供や関係構築をした上で、2回目の対面授業を実施したことで、スムーズに大学生が中学生の中に溶け込むことができた。

教室には地域住民もオブザーバーとして参加し、世代を超えたコミュニケーション創出にも資するものとなった。

今後の改善点・課題

今回の取り組みでは、企画やオンライン授業には地域住民の参加はなかったが、計画的にすすめることでさらに地域側のモチベーションアップや、地域活性化の取り組みへの導入として効果的な活用ができるのではないかと考えられる。



1回目オンライン授業の様子（左写真）

2回目対面授業の様子（右写真）

授業・プログラム名 3年課題研究

担当者

京都府立京都すばる高校
起業創造科
河野 翔汰・北川 博士
地域コーディネーター
三木 俊和

受講生数（実施年度）

10人（2021～2022年度）

スタッフ数

高校：2人
フィールド：1人

使用した機材

大学：プロジェクター、Wi-Fi
高校：タブレット、スマホ回線

オンライン活用の目的と内容

コロナ禍により高校生の地域に出る授業が委員会のガイドラインにより制限されていた（現在は条件付きで可能となっている）。

そこで、本校地域コーディネーターが現場に出向き、オンラインでつないだ映像を教室へ配信しながら質疑応答を実施した。

*京都市伏見区役所、京都市ユースサービス協会との連携

取り組みから得られた効果

今回の取り組みにより、コロナ禍におけるガイドラインの制限範囲内で外部連携におけるフィールドワーク実施が可能となった。時間的制約も大きく改善された。

高校側の通信回線やプロジェクター等の備品において、上記活動を行うには十分整備されているとは言えない。

今後の改善点・課題

現地から中継するには問題が多い。本校では、文科省事業により地域コーディネーターが配置され、事前に訪問を重ねたうえで、当日の運営が滞りなく進行できた。多くの学校に地域と高校をつなぐ「コーディネーター」の配置が望まれる。また、高校内での通信環境もまだまだ十分とは言えず、一部の教室使用に限定される。



大学と地域で「手作り竹灯籠 & 星空鑑賞」イベント開催

授業・プログラム名

政策実践・探究演習（国内）
「洲本プロジェクト」

担当者

龍谷大学政策学部
講師 石倉 研
実践型教育プランナー
櫻井あかね

スタッフ数

大学：2人
地域：1人

受講生数（実施年度）

27人（2022年度）

使用した機材

大学：PC、webカメラ、
マイク・スピーカー、Zoom
地域：PC、webカメラ、
マイク・スピーカー、Zoom、
Google Jamboard、
Googleドライブ、
Googleスライド

オンライン活用の目的と内容

洲本プロジェクトは、2022年10月2日洲本市千草竹原で「手作り竹灯籠&星空鑑賞」イベントを開催した。このイベントを企画から担当した千草竹原班は、6月から10月にかけて、月1~2回のペースで現地とオンライン会議を重ね準備や振り返りを行った。会議には学生と教員、洲本市地域おこし協力隊員小林氏が参加した。8月8~9日に千草竹原で会場下見と竹灯籠の試作を行った。オンラインと対面を組み合わせることで、密度の高いコミュニケーションを図ることができた。

取り組みから得られた効果

オンライン会議は小林氏がファシリテーターとなって進行した。デジタルホワイトボードGoogle Jamboardを使い、取り組みたい内容を整理した。その情報をもとに学生は自らのアイデアを企画書にまとめた。企画書のブラッシュアップ、準備から当日運営までのタスクを考える逆算方法、予算の立て方、スタッフ役割分担表の作成など実践的な学びを深めることができた。

今後の改善点・課題

昼間は授業があるため、オンライン会議の開催は夜遅い時間になる。その点が双方にとって負担であった。Zoomの無料プランは40分までという制限があり、有料アカウントを持っている教員が毎回会議の設定を行った。学生のリーダーが有料アカウントを取得できるようにするなど工夫が必要である。



04 相互訪問型国際交流プログラムの 事前学習で活用されたオンライン学習

授業・プログラム名

政策実践・探究演習（海外）
「台湾PBL試行プログラム」

担当者

龍谷大学政策学部
准教授 金 紅実
実践型教育プランナー
櫻井 あかね

スタッフ数

大学：3人
台湾：3人

受講生数（実施年度）

14人（2022年度）

使用した機材

大学：PC、カメラ、マイク・
スピーカー、スクリーン、
Google Meet、LINE

台湾：PC、カメラ、マイク・
スピーカー、スクリーン、
Google Meet、LINE

オンライン活用の目的と内容

本プログラムは、龍谷大学政策学部と台湾の国立中山大学による相互訪問の共同学習である。座学で学んだ専門知識を地域社会が直面する具体的な課題に結び付け、課題の発見・討論・提案のプロセスを通して探究する。実践的かつ国際比較の視点から、課題解決のために必要な視点や接近方法を学ぶ国際交流プログラムである。年間計画に基づいて学習スケジュールを作成し、事前学習、相互訪問、事後学習の3段階から構成される。事前学習ではオンラインの共同学習を3回実施し、相互訪問のための専門性や視点、学内外の教学資源をシェアし、国際交流による学びを確実なものにした。

取り組みから得られた効果

オンラインによる事前の共同学習により、短期間の相互訪問の成果を深めることができた。事前学習の段階で、輪読の教材から専門性、多様性及び相違性を理解できるほか、地域社会への関心や接近方法論の違いと共通点を習得することができた。双方の共同チームを結成した。龍谷大学政策学部在学する中国人留学生の通訳・翻訳を通じて、言語の垣根を超えた国際交流の難しさや楽しさを訪問前に体験し、回数を重ねるうちにスムーズな国際交流のノウハウを自ら見出し、双方の受講生の能動的な学びにつなげることができた。

今後の改善点・課題

面識のない受講生同士がオンラインで対面し、毎回の限られた時間内で与えられた課題をスムーズにこなし総括することは、対面式交流と比較して一定の難しさがある。資料の事前共有や通訳を介したコミュニケーションの実施に指導方法の改善が望まれる。オンラインによる国際交流の到達点や到達点に至らせるための実施要領などの教育方法論を日台双方の担当教員間で議論し改善していく必要がある。



龍谷IP*事業 「龍谷大学だからこそ 3キャンパス共通オンライン授業の展開」

*龍谷IP：Ryukoku Inventive Program

授業・プログラム名

龍谷大学 おしえて！センパイ
プロジェクト

担当者

龍谷大学
深尾 昌峰、松永 敬子、
並木 州太朗

スタッフ数

深草キャンパス：4人
瀬田キャンパス：4人

受講生数（実施年度）

150人（2022年度）

使用した機材

深草キャンパス：プロジェクター
3台（うち天吊り1台）、スクリー
ン3台（うち天吊り1台）、
360度カメラ1台、PC4台、スイ
ッチャー4台等

瀬田キャンパス：プロジェクター
2台（うち天吊り1台）、
スクリーン2台（うち天吊り1
台）、360度カメラ1台、PC4
台、スイッチャー4台等

オンライン活用の目的と内容

2021年度から3キャンパスで時間割が統一され、学部横断的教育内容の実施環境が整いつつあるが、現状スクールバスで学舎間を移動するか、オンデマンドまたはライブ配信の科目を受講することになり、前者は地理的・時間的な制約があり、後者は受講者の体験価値や教育効果に課題が残る。本事業では、オンライン講義において、受講生がよりリアルに臨場感や没入感を持ちながら受講できるよう、ICTを高度に活用した教授法の開発及びそのためのICT機器等の整備を行い、教育成果をあげることを、それを全学的に波及することを目的としている。

取り組みから得られた効果

音響、視聴環境ともに良好であった。大型の複数のスクリーンで、双方の会場をライブ配信することで、遠隔の会場でも疎外感なく当事者性を持って参加することができる環境が整っており、参加者の雰囲気も良好で満足度が高かった。



今後の改善点・課題

インターフェースとしてはYouTubeとZoomを使用した。既存のキャンパスの映像・音響設備を使って、双方向性の臨場感ある学修空間を作ろうと思うと、事前の下見、回線の設定、機器のレンタル、構築、設定、機器のテスト等膨大な時間が必要とされ、利用されにくい状況が生じる。それをワンストップで専門的な技術なく実現するためのインターフェース構築のための知見が得られた。

